＜研究ノート＞

神聖ローマ皇帝カール４世の自叙伝
－翻訳と註解（4）－

小松　　進*

The Autobiography written by Holy Roman Emperor Charles IV:
Translation into Japanese and Commentaries (4)

Susumu KOMATSU *

１．はじめに

神聖ローマ皇帝ハインリヒ７世がイタリア征旅の途上で客死して以来、イタリアはルクセンブルク家にとって宿命の土地に、少なくとも、因縁の土地になった。ハインリヒに続いてカールの父ヨーハンも、そしてカール自身も、イタリアの政治情勢に深く巻き込まれたというだけではない。パリの宮廷で学問に励んだ少年のカールが初めて現実の政治世界に足を踏み入れ、そこで繰り広げられる権力闘争の凄まじさを目の当たりにしたのがイタリアの地であった。しかも、イタリアで政治の世界に最初の一歩をしるしたカールを待ち受けていたのは、自分自身に対する毒殺未遂事件という衝撃的な洗礼であった。イタリアこそ、いささか学僧めいたカールを現実的な政治家へと脱皮させていく舞台となったのである。謀略と背信の渦中で悪戦苦闘しながらこのイタリアの地で政治人生へ踏み出す若き日の体験をカール自身が生々しい筆致で綴るのが、今回訳出する自叙伝の第４章である。

第４章の梗概は以下のとおりである。

・皇帝ルートヴィヒ４世治下のドイツとイタリアの情勢
・ケルンテン、ティロール、北イタリアにおける父王ヨーハンの家門勢力拡大政策
・カールに対する毒殺未遂事件
・ルクセンブルク家に対する北イタリア諸都市の反乱

波瀾の幕開けで始まるカールの最初のイタリア滞在は、1331年から1333年にかけての足かけ３年に亙り、この間の叙述にカールは第４章から第７章までの４章分を割く。自叙伝でカールの半生が鑑戒として綴られるのが全体で９章分であることを考えれば、これは異例とも言えるカールの力の注ぎようである。それゆえ、イタリアでの３年間に亙るこの青春時代の奮闘記では、カール自身の実体験が最も直截かつ詳細に語られ、だからこそ、自叙伝の中でも最も精彩に富んだ迫真の叙述が展開される。

＊　筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

ところで、カールがイタリアの地に初めて足を踏み入れるのは、父王ヨーハンの思惑と指示にもとづく。現実政治の上ではいまだ未成熟なカールに、独自の判断でルクセンブルク家の家門政策を追求する余地はない。自叙伝の叙述の背後で父王ヨーハンはルクセンブルク家の勢力拡大政策を精力的に推し進め、それを背景にして自叙伝の表舞台に立つカールは、実はヨーロッパ世界という盤上でヨーハンが自在に操る駒の一つでしかない。つまり、自叙伝の世界の政治的枠組みをお膳立てしたのは、ルクセンブルク家の当主としてのヨーハンの目論見であり政略なのである。本稿では、自叙伝の第４章を訳出するとともに、自叙伝の舞台を陰で演出したチェコ国王にしてルクセンブルク伯たるヨーハンの家門勢力拡大政策、とりわけ、ヨーハンが北イタリア諸都市を支配下に収めるまでの過程を補足説明しておきたい。

２．自叙伝第４章（翻訳）

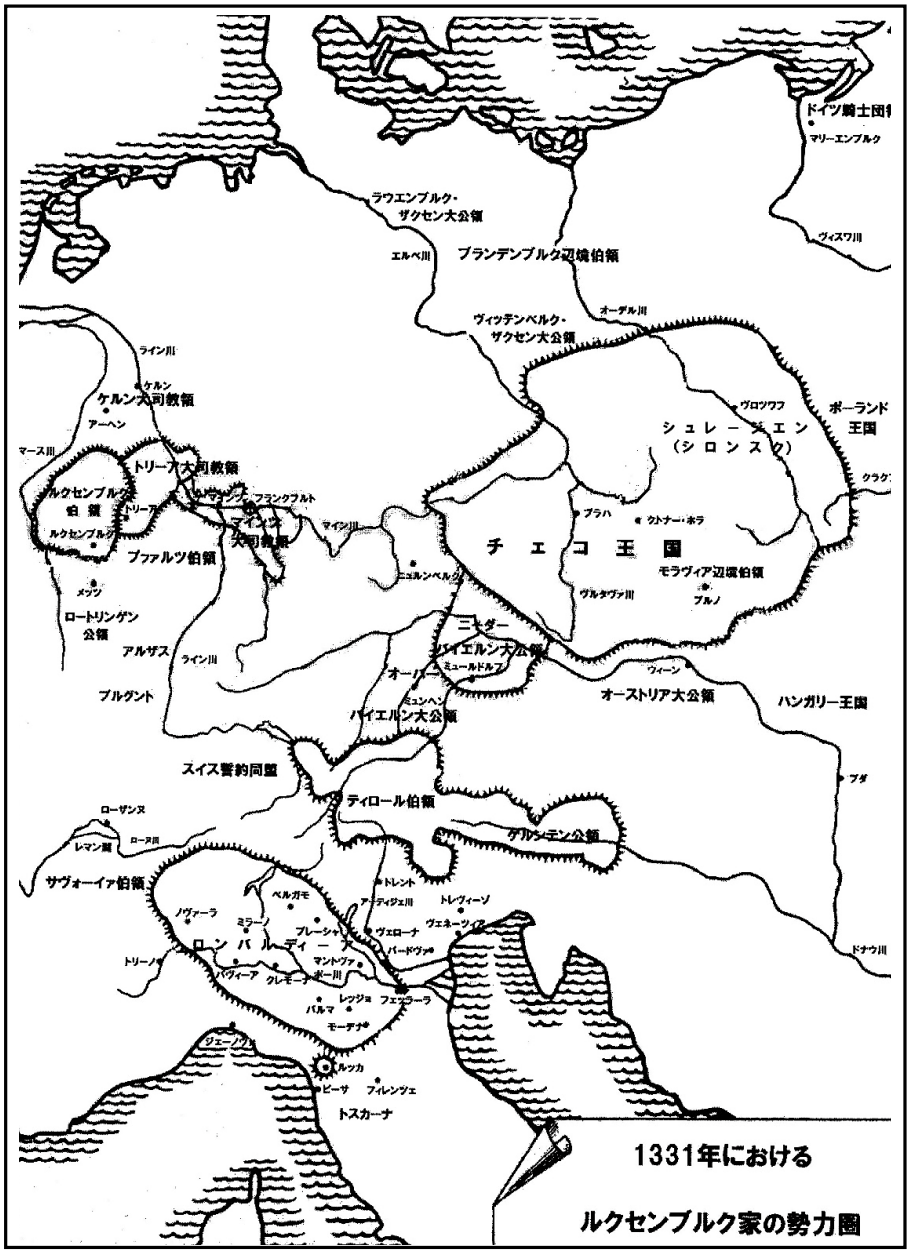
こうして余はフランスから戻り、ルクセンブルク伯領でわが父と落ち合った。その当時、皇帝権を掌握していたのはバイエルンのルートヴィヒ[1]で、この人はわが祖父ハインリヒ７世の長逝後、オーストリア大公フリードリヒ[2]と対立し、国内不一致の中でローマ人の国王に選出され、ルートヴィヒ４世と称していた。

このルートヴィヒを選出し、敵対したオーストリア大公フリードリヒその人を捕虜にした勝利に至るまで[3]ルートヴィヒに左袒したのは、チェコ国王たるわが父ヨーハン、マインツ大司教[4]とトリーア大司教[5]、それに最後のブランデンブルク辺境伯ヴォルデマール[6]であった。一方、フリードリヒに左袒したのは、ケルン大司教[7]、ザクセン大公[8]、そしてプファルツ伯[9]である。その後　ルートヴィヒはローマに登り、教皇ヨハネス22世[10]の御意志に逆らって、ヴェネーツィア人の司教から皇帝の冠を戴き、聖別式を施された[11]。さらには、小さき兄弟会[12]に所属するニコラウス[13]という名の対立教皇を担ぎ出したが、このニコラウスは後に教皇の手に引き渡され、悔悛して生涯を終えることになる。ルートヴィヒの方は、その時にはすでにドイツに引き返していた[14]。さらに詳しくはローマ人の年代記に明らかなとおりである。

余がフランスからルクセンブルク伯領に戻りわが父とその地で落ち合ったまさにその頃、アルザスのコルマール市をオーストリア大公が攻囲し[15]、ルートヴィヒはその攻囲を解くのに手を焼いていた。わが父が両者の許に赴き、この大公とルートヴィヒとの間に和解を成立させた[16]。

次いで父は、かつてチェコ王国から追いやったケルンテン公[17]をティロール伯領におとなった。この人の最初の妻、すなわち、わが母の姉[18]はすでに不帰の客となっていた。しかし、ケルンテン公は最後にブラウンシュヴァイク公の妹[19]と再婚し、その妻との間に一人娘[20]をもうけた。この一人娘をケルンテン公はわが弟ヨーハンに嫁がせ、自分の死後その支配権をことごとく弟に譲ることにした。

続いてわが父が辿り着いたのは、トレント市であった。折しも、わが母がプラハで殉教聖人ヴァーツラフの日に永眠した[21]。しかしわが父はトレント市に留まり、その間にロンバルディーアの諸都市が父の手に帰した。すなわち、ブレーシャ市、ベルガモ、パルマ、クレモーナ、パヴィーア、レッジョ、モーデナで、さらにトスカーナではルッカとその支配に服すコンタードと従属領域[22]のすべてある[23]。わが父は諸都市を経巡り、やがてパルマに居を構えた。これら諸都市の統轄を引き受けることになったのはミラーノのアッツォ・ヴィスコンティ[24]で、この人



Raymond Cazelles, Jean l'Aveugle, comte de Luxembourg, roi de Bohême, Paris, 1947 の Carte de la puissance Luxembourgeoise en 1331をもとに作成

はすでにミラーノとノヴァーラの両市を治めており、同じ時期にわが父からその名代として両市を委ねられていたのである。

その時、わが父はルクセンブルク伯領の余に使者を遣わした。余の方は、さっそくメッツ市を過ぎ、ロートリンゲン公領を抜け、さらにブルグントとサヴォーイァを経て湖畔[25]のローザンヌ市へと道を急いだ。次いでブリックの山々を越えてノヴァーラ領内に足を踏み入れ、そこから聖金曜日[26]にわが父の支配下にあったパヴィーア市に辿り着いた。

さて、復活祭の日、すなわち、余のパヴィーア到着から３日後[27]のことである。余の一行が毒を盛られ、余自身は神の恩寵に守られて難を免れた。荘厳ミサが長引き、余はミサで聖体を拝領するため、ミサの前に食べ物を口にしようとしなかったからである。余がおそい朝食の席に足を運んだ時、余の一行、就中、この朝食の前に食べ物を口にした者たちが突如重体に陥ったことを報らされた。余は食卓に着いても何一つ口にする気になれず、われら一同は恐怖におののいた。そしてこんな有様であたりを見回すと、容姿にすぐれ機敏に立ち回る男に、余は目をとめた。それは余の見知らぬ男で、食卓の前をうろつきまわり口がきけぬふりをしていた。この男が怪しいと睨み、余はその男を捕えさせた。３日にわたる数々の拷問の末に、その男は口を開き白状した。厨房で食べ物に毒物を混入したのはその男で、それがミラーノのアッツォーネ・ヴィスコンティの指図であり企みであることをだ。この毒物で命を落したのは、わが宮廷長でベルクの領主ヨーハン、ホーエンキルヘンのヨーハン、わが膳夫（かしわで）ケイラのジーモンで、その他にも多数の者たちがあとを追った。

ところで余がその折に滞在していたのは、聖アウグスティーヌス[28]に捧げられた修道院であった。パヴィーアにあるその修道院[29]にこそ聖者の遺骸が安置されているのである。かつてこの修道院からバイエルンのルートヴィヒが修道院長と律修参事会員を追い出してしまったのだが、余はこの人たちを呼び戻しその修道院に住まわせることにした。修道士たちが世を去った後、教皇ヨハネスは修道院をアウグスティーヌス修道参事会に委ね、今日でもこの修道参事会がそこの所有者となっている。こうしたことはわが父の支配下でなされ、この修道参事会に所有権を引き渡したのはわが父に他ならなかった。

この後、余はわが父のいるパルマ市に辿り着いた[30]。時に余は16歳になっていた。ところが、わが父は支配領全域の仕置きと余の後見をサヴォーイァ伯家のルドヴィーコ殿[31]に託してしまった。ルドヴィーコがミラーノの支配者アッツォーネ・ヴィスコンティの舅であったにも拘らずにだ。そして父はパルマを去って[32]フランスへと赴き、自分の次女、すなわち、わが姉グータ[33]を、フランス国王フィリップの嫡男ジャン[34]に輿入れさせた。長女のマルガレーテ[35]の方はすでにバイエルン大公ハインリヒ[36]に嫁いでいたのである。

余がサヴォーイァのルドヴィーコ殿とともにイタリアに留まっていたその時のことである。ひそかに余とわが父に敵対する同盟が結ばれた[37]。それに名を連ねたのは、アプーリャ王ロベルト[38]、フィレンツェの人々、ミラーノの支配者アッツォーネ・ヴィスコンティ、当時パードヴァ、トレヴィーゾ、ヴィチェンツァ、フェルトレ、ベッルーノの諸都市に勢力を拡げていたヴェローナの支配者[39]、これまでわれらに忠誠を誓っていたマントヴァの支配者[40]、それにフェッラーラの支配者[41]であった。そしてこの連中は、余の支配下にあった諸都市をひそかに自分たちの間で分割しようとした。ヴェローナの支配者はブレーシャとパルマの両市を、マントヴァの支配者はレッジョを、フェッラーラの

支配者はモーデナを、ミラーノの支配者はパヴィーア、ベルガモ、クレモーナを、フィレンツェの人々はルッカを、という具合にである。こうしてこの連中は、突如一斉に、これら諸都市の内部で秘密裏に謀叛を組織し、フェーデを宣告する[42]ことなく、われらに襲いかかってきた。これら諸都市について、その時まで、われらは一切懸念を抱いてはいなかった。というのも、それらはわれらと盟約を結び、文書でわれらに誓いを立て、誠実に父とわれらを助けると固く約束していたからである。

しかるにヴェローナ人はブレーシャに侵入し[43]、ミラーノ人はベルガモを包囲してまたたく間にそこを占拠してしまった[44]。パヴィーアの人々もわれらに対して叛旗を翻し、その支配権を奪い取ってしまう者たちが現われた。すなわち、ベッカリーア家の人々で、この一族はその都市で他のどの人々にもましてわれらが頼りにしていた者たちであった。こうして、これら同盟を結んだ者たちは一斉に、四方八方から、われらに対し猛然と戦いを挑んできた。しかし、先に述べたわれらの国王名代にして後見人たるサヴォーイァのルドヴィーコ殿は、危険の何がしかを十分察知していたにちがいない。ところが、ルドヴィーコは対応策を講ずるどころか、どんな思惑があってかは知らないが、おそらくは自分の娘婿であるくだんのアッツォーネ・ヴィスコンティへの情誼からであろう、苦境の最中にわれらを置き去りにしてパルマを立ち去ってしまったのである。だが、パルマ市民たるロッシ家の人々、レッジョのフォリアーニ家とマンフレーディ家の人々、モーデナのピーイ家の人々、クレモーナの旧家たるポンゾーニ家の人々、それにピストーイァのレアーリ家出身でルッカのカピターノ[45]たるシモーネ・フィリッポ殿たちが誠意をもって余の難事に力を貸し、できる限りのあらゆる助言と援助を惜しまなかった。この点は以下の記述でさらに明らかに語られるとおりである。

３．中世ルクセンブルク家の方向転換

中世ルクセンブルク家で神聖ローマ帝国の帝冠を戴いた父ハインリヒ７世と嗣子カール４世の二人の間に挟まれ、チョコ国王にしてルクセンブルク伯たるヨーハンの歴史的形姿はいささか影が薄い。ルクセンブルクにおいてはともかく、ヨーロッパの多くの歴史叙述において、烈々たる野望を胸にたぎらせながら時代を疾駆した遍歴の国王ヨーハンが、叙述の主役として華々しい脚光を浴びることはほとんどない。英仏百年戦争の激戦クレシーの戦いで壮絶な最期を遂げた盲目王として名を知られることはあっても、その治績の多くは史家の注目を集めることなく歴史の片隅に追いやられ、こうした関心の低さがこの野心家を歴史の中に正当に位置づけることを困難にしている。しかし、ハインリヒ７世が着手したルクセンブルク家の新たな方向転換、すなわち、フランス王権との強固な同盟関係の構築とそれを背景とした皇帝権力への接近、帝国東部における家門勢力の拡大という新規軸を、漠たる構想から確たる現実へと軌道に乗せ、中世末期におけるヨーロッパ世界の政局を突き動かす原動力の一つが、ヨーハンの精力的な活動であったことは確かである。そして、時には向こう見ずで成算のない冒険的企図に終わることがあったものの、このヨーハンのヨーロッパ全土をまたにかけた政略と奔走こそが橋渡しとなって、ハインリヒ７世の蒔いたルクセンブルク家隆盛の種子は、カール４世の治世に豊かな実りを結ぶことになるのである。

ハインリヒ７世の下で中世ルクセンブルク家が新たな方向転換を図る契機となったのは、1288年のヴォリンゲンの惨敗である。この戦いはリンブルク公領の相続をめぐるルク

センブルク伯とブラバント公の対立に端を発し、両者の対立に帝国北西部の諸侯が巻き込まれ、ライン川下流域における両陣営間の覇権争奪戦に発展したものである。この対立に決着をつけたのがヴォリンゲンの戦いで、この決戦でルクセンブルク家は当主のハインリヒ６世自らが戦場に命を落とすという手痛い打撃を蒙った。この敗戦直後にルクセンブルク伯の地位を継承したのが、ハインリヒ７世（1275頃～ 1313年）である。

こうして登場したハインリヒ７世が直面したのは、帝国北西部での勢力拡大の可能性を失い、それどころか、この地域で孤立しその存立さえ脅かされるに至ったルクセンブルク家の危機的状況である。この危機打開のためにハインリヒが採った方策が、強大な隣国フランスに庇護を求めることであった。ハインリヒはフランス国王フィリップ４世自身から騎士叙任の刀礼を受け[46]、この国王の家臣となった。帝国諸侯の一人としてドイツ国王に臣従するかたわら、フランス国王とも主従契約を結んだのである。貨幣知行を給付される代わりに、ハインリヒはフランス国王の要請があれば軍事奉仕をする義務を負った。当時、ボルドーを中心とするギュイエンヌ地方はイングランドの支配下にあり、この地の領有権をめぐってフランスとイングランドはしばしば激突した。フィリップ４世の治世にもこの争いが生じ、1295年、ギュイエンヌ地方のある南フランスのアキテーヌにフランス軍が出征した折には、ハインリヒもこれに加わり、家臣としての義務を果たしている[47]。

フランス国王の忠実な封臣になるというハインリヒの選択は、ルクセンブルク家に安泰を約束したばかりか、そのさらなる発展を促す思わぬ僥倖をもたらすことになる。ヴォリンゲンの戦いで覇を競った宿敵ブラバント公ヨーハン１世とハインリヒとの和解を仲介したのはフランス王室で、国王フィリップ４世の母后マリーはブラバント公家の出身であったことから、ルクセンブルクとブラバントの不和の解消に心を砕き、1293年、ハインリヒとブラバント公の娘マルガレーテの結婚を実現させた[48]。この結婚により、ルクセンブルク家が帝国北西部で孤立するという危機的状況は解消された。そして、両家の和解の象徴として、ハインリヒとマルガレーテとの間に、1296年、待望の嗣子が誕生する。その嗣子には、ルクセンブルク家伝来のハインリヒではなく、母方の祖父のブラバント公と同じヨーハンという名が授けられた。この命名は、明らかに、両家のどちらが勝者であったかを示している。

ハインリヒはフランス王家との結びつきをさらに深めるため、1303年頃、まだ10歳にも満たぬヨーハンをパリの宮廷に送り出した[49]。フランス王室に近づくためにハインリヒ自身がパリの宮廷で若き日を過ごしたように、嗣子ヨーハンにもこの宮廷でフランス流の教育を施させようと望んだのである。後年、ヨーハンは“騎士の鑑”と時人に謳われることになるが、冒険と栄誉を愛する騎士道精神をヨーハンが身につけたのは、ヨーロッパ中世騎士道文化の中心フランスの宮廷においてであったにちがいない。また、ヨーハンはルクセンブルク語（ドイツ語の一方言）、フランス語、チェコ語の３か国語を自在に操り、ラテン語をも解したと伝えられるが、フランス語とラテン語をヨーハンが学んだのもパリ滞在中でのことであったと思われる[50]。さらに、ヨーハンがパリ大学に在籍したという記録が残されているが[51]、そのことがヨーハンの人間形成に何らかの影響を及ぼしたとは想定できない。カールの自叙伝に描き出されるヨーハンは、学識豊かな文人ではなく、戦場を馳駆する武人としての騎士の姿だからである。

嗣子ヨーハンの教育をパリの宮廷に託したハインリヒによるフランス王権への接近の飽くなき試みは、やがてルクセンブルク

家がヨーロッパに雄飛する大転機をハインリヒにもたらす。その転機とは、ルクセンブルク家によるトリーア大司教位の獲得である。トリーアはルクセンブルクに近接し、そこへの進出は長年にわたるルクセンブルク家の宿願であった。その大司教位が、1308年に空席となった。ハインリヒは、末弟バルドゥインをその要職に就けるために奔走する。ただし、それを実現するためには、フランス王権の強力な後押しが必要であった。というのも、フランス国王フィリップ４世は1303年にアナーニ事件でローマ教皇ボニファティウス８世を憤死せしめ、その後を襲ったクレメンス５世をフランス南部に留めて自分の監視下に置き、この囚われの教皇に絶大な影響力を行使していたからである。ローマ教皇の決定は、フランス国王の意向が左右した。フィリップに近づき封臣となってその信頼をかちえていたハインリヒに、またとない好機が到来した。フィリップにとっても、いわば自分の息がかかったルクセンブルク家が帝国内に勢力を拡大することは、フランス王権の威光が帝国内に浸透することを意味していた。バルドゥインを押すフィリップの口添えに　教皇クレメンス５世は逆らえなかった。こうして、トリーア大司教バルドゥインが誕生する。

バルドゥインがトリーア大司教位に登ったことは、隣接するこの大司教領をルクセンブルク家の勢力圏に取り込んだという家門勢力拡大の成功を意味しただけではない。トリーア大司教は神聖ローマ帝国の国王を選出する７人の選帝侯の１人であり、バルドゥインがこの顕職を掌中に収めたことは、ルクセンブルク家にとって帝国の王位を窺う可能性の道が拓かれたことをも意味したのである。しかも、この可能性が現実となる機会が、思いもよらぬ短期間のうちに到来した。バルドゥインがトリーア大司教領の主人となったその1308年、ドイツではハプスブルク家の国王アルブレヒト１世が甥の凶刃に斃れるという前代未聞の不祥事が発生した。空位となった国王の座をめぐってさまざまな駆け引きが繰り広げられる中、ルクセンブルク伯ハインリヒを国王に擁立しようという計画が浮上した。この計画の首謀者は、選帝侯の一人であるマインツ大司教ペーター・フォン・アスペルトであった。この大司教はもともとルクセンブルク家に仕えるミニステリアーレ（家士）の家系に生まれ、老練な教会政治家として帝国内に隠然たる影響力を保持していた。このペーター・フォン・アスペルトが、トリーア大司教に就任したばかりのバルドゥインにハインリヒ擁立の計画を持ちかけたのである[52)]。ここに、ドイツの選帝侯たちの内部に、ハインリヒを支持する強力な核が形成された。この二人の大司教の精力的な働きかけで残る選帝侯たちもルクセンブルク陣営に取り込まれ、その年の明けぬうちに、ハインリヒの国王選出が瞬く間に実現した。ルクセンブルク家がハプスブルク家のような強大な領邦君主ではなく、ハインリヒにはドイツの他の諸侯たちを脅かす力はないと判断されたことも幸いした。

ルクセンブルク家にとっても、そしてまたハインリヒ自身にとっても、1308年はまさに運命の分岐点であった。フランス国王の封臣という地位に甘んじていたハインリヒが、一躍、神聖ローマ帝国の玉座に登りつめ、帝国の西端に位置していた辺境の必ずしも強大とは言えない諸侯家が、突如、帝国全土の主役に躍り出たのである。偶然としか言いようのない運命の連鎖は、さらに続く。バルドゥインのトリーア大司教位獲得が帝国の玉座への道を拓いたように、ハインリヒの王位獲得が家門勢力拡大政策の新たな可能性の道を拓くことになった。

ハインリヒが王位に即いた翌年の1309年、チェコ王国から使節団が新王の許を訪れた。使節団が携えたのは、ハインリヒの嗣子ヨー

ハンをチョコ王国の新しい国王に迎えたいという懇願である。チェコ王国では10世紀以来プシェミスル家が王位にあったが、当初より、隣国の神聖ローマ帝国に威圧され、歴代の国王はドイツ人の国王に臣従することによって王国の存続を図ってきた。しかしチェコ王国は徐々に力を蓄え、中世後期には帝国国内で選帝侯の地位を獲得し、さらには東ヨーロッパ一帯に勢力を拡大するに至った。その絶頂期を画したのがカール４世の母方の祖父ヴァーツラフ２世の治世（位1278～1305年）で、ヴァーツラフはチェコ王国のほかに、ポーランド王国とハンガリー王国の国王をも兼ね、東ヨーロッパ一円を支配する強大な君主となったのである。ところが、このチョコ王国の栄華はヴァーツラフ２世の死とともに、突如、暗転する。栄光につつまれたこの君主の後を襲ったその嗣子ヴァーツラフ３世は即位後わずか１年足らずで暗殺され、チェコ民族伝来のプシェミスル王家に男系の王位継承者が絶えてしまうのである（1306年）。王国の運命の鍵を握ったのは、３人の女性であった。ヴァーツラフ２世の後妻で未亡人となったエルジュビエータと、ヴァーツラフ２世と先妻との間に生まれたアンナとエリシュカの姉妹である。まず、ヴァーツラフ２世の長女アンナを娶っていたケルンテン公ハインリヒが王位継承者に名乗りを上げた。そこにドイツ国王アルブレヒト１世を父に持つハプスブルク家のルードルフが介入してケルンテン公から王国の実権を奪い、ヴァーツラフ２世の未亡人エルジュビエータを王妃に迎えた。ところが、ルードルフは程経ずして病に斃れ、ケルンテン公が王位に返り咲く（1307年）。しかしケルンテン公は、チェコ人の人心を掌握することに失敗した。東ヨーロッパに雄飛したヴァーツラフ２世時代の栄光を記憶に留めるチェコ人は、それにあまりにも見劣りするケルンテン公の統治に満足できなかったのである[53)]。しかも、プシェミスル家断絶で混乱に陥ったチェコ王国に、ケルンテン公は安定と秩序をもたらすことができなかった。こうしてケルンテン公排斥を目論む党派が形成され、その党派の眼は宗主国ドイツの新しい国王になったルクセンブルク家のハインリヒ７世とその若き嗣子ヨーハンに注がれることになる。ハインリヒ７世を擁立し新国王の腹心となったマインツ大司教ペーター・フォン・アスペルトはかつて長きに亙りヴァーツラフ２世の書記官長を務め、帝国で最もチェコ王国の内情に精通した、チェコ人にとっては頼れる人物でもあった。ケルンテン公排斥派は、ハインリヒの嗣子ヨーハンにアンナの妹エリシュカを嫁がせ、ケルンテン公に替わる新たなチェコ王国の救世主を迎え入れようと画策した。

ドイツ国王に即位して間もなく、ハインリヒはパリの宮廷からヨーハンを呼び戻していたが、チェコの使節団に請われるまま、このヨーハンをチェコ王国に向かわせることを躊躇した。ヨーハンが13歳と未成年で、何が待ち受けているか分からない異郷にうら若い嗣子を送り込むことはあまりにも危険であった。当時、ハインリヒはローマでの皇帝戴冠を目指してイタリア遠征を企画しており、ヨーハンをチェコ王国に送り出すとルクセンブルク家の勢力は二分され、ヨーハンに十分な支援を行なうことができなかった。しかし長い逡巡の後、ハインリヒは決断する。国王の業務に専念するために、1310年、ハインリヒはルクセンブルク伯の家督をヨーハンに譲り、プラハを秘かに抜け出して来たエリシュカと若きルクセンブルク伯の結婚式を挙行した。そして、政治的手腕に優れ、篤い信頼を寄せるペーター・フォン・アスペルトを最高顧問につけ、応召した帝国軍とともに14歳になったばかりのヨーハンと18歳のエリシュカをチョコ王国に送り出し、ハインリヒ自身は残ったルクセンブルク家の勢力を率いてイタリア半島に南下した。

ヨーハンの率いる帝国軍は、ケルンテン公に背いたチェコ人の反乱兵と合流し、勢いよくチェコ王国に攻め入ったが、戦局は思惑どおりには進展せず、ケルンテン公の追い落としは難航した。この時物を言ったのが、ペーター・フォン・アスペルトの経験豊かで並外れた交渉能力である。チョコ王国内に広く人脈を持っていたこのマインツ大司教は、1311年、プラハ市民を調略して首都の開城を実現し、市民に見放されたケルンテン公をチェコの国外へ追いやった。こうして王国の首都プラハを手に入れたヨーハンは、早速マインツ大司教の手で国王に戴冠され、チェコ王国はルクセンブルク家の所有に帰したのである。

この成功に対して、イタリア半島に南下したハインリヒの率いるもう一つの遠征軍を待ち受けていたのは、相次ぐ悲運と過酷な試練であった。イタリアでハインリヒの到来を歓迎したのは、ダンテのような政争に敗れて祖国を追われた亡命者たちで、イタリア北部の諸都市の多くにとっては、ハインリヒの到来は招かざるよそ者の突然の侵入でしかなかった。イタリア北部は名目上神聖ローマ帝国の支配下にあったが、12世紀後半から13世紀前半にかけて、この地の諸都市は帝国のシュタウフェン王家と死闘を繰り広げて自治権を獲得し、実質的には独立の都市国家コムーネを形成していた。アルプス以北のドイツ国王の支配から解放された帝国領イタリアの諸都市にとって、遠征軍を引き連れたハインリヒ７世の南下は、自分たちの独立を脅かすまさに悪夢の再来であった。名目上とはいえ正規の国王に帰順するどころか、イタリア諸都市はハインリヒに対して一斉に叛旗を翻した。ハインリヒはローマでの皇帝戴冠こそ実現させたものの（1312年）、そこへの道中で同行していたすぐ下の弟ヴァルラムを戦場の流れ矢で、妃マルグレーテも不慮の病で失った。一族の悲運に相次いで見舞われたハインリヒは、敵対する諸勢力のただ中で孤立した。チェコ王国の奪取に成功したヨーハンに援軍の派遣を要請したが、その到着を待たずに、1313年、トスカーナ地方のシエーナ近傍の小城ブオンコンヴェントで、ハインリヒ自身も不慮の病で客死した。

ルクセンブルク家の危機回避の手段としてハインリヒが採ったフランス王権への接近は、思いもよらない成功をルクセンブルク家にもたらした。末弟バルドゥインのトリーア大司教位獲得はこの方策の直接の成果であり、この成果はハインリヒによる神聖ローマ帝国の王位獲得へ道を拓いた。そしてこの王位獲得は、帝国東方のチェコ王国への家門勢力拡大を呼び寄せた。この成功の連鎖は、ハインリヒが意識的に企図した構想の実現ではなく、むしろ、予期せぬ一連の僥倖の賜物だったと言える。こうしてルクセンブル家の方向転換を図らずも体現することになったハインリヒの事業は、ルクセンブルク家で残された二人、すなわち、チェコ国王にしてルクセンブルク伯たるヨーハンと、イタリア遠征から一人生還したトリーア大司教バルドゥインに引き継がれた。

４．ヨーハンの試練

帝国北西部で勢力拡大の可能性が閉ざされたルクセンブルク家に、ハインリヒ７世は将来進むべき新たな地平を切り拓いた。だが、その地平の彼方に何が待ち受けているのかを見届けることなく、ハインリヒはイタリアの地であまりにも早い不慮の死を遂げる。いまだ茫漠としたまま残されたハインリヒの新路線を引き継ぎ、それを確固たる軌道に乗せる事業はヨーハンに委ねられた。しかし、17歳といまだ若いこの後継者の前には仮借なき冷厳な現実が立ちはだかることになる。

父帝ハインリヒが客死した時、ヨーハンはためらうことなく新国王への立候補を表明した。叔父のトリーア大司教バルドゥインと

ヨーハンの政治指南役のマインツ大司教ペーター・フォン・アスペルトはともに選帝侯で、国王選挙に際してヨーハンに票を投じるのは確実であった。ところが、13世紀後半にドイツが選挙王制へと移行して以降、同じ家門から連続して国王が選出された先例がなく、いま一人の聖界選帝侯のケルン大司教ハインリヒ・フォン・ヴィルネブルクを筆頭に、ルクセンブルク陣営に同調することを拒む選帝侯が相次いだ。そこへ、ハプスブルク家のフリードリヒ美公が、国王候補に名乗りを上げる。国王選挙におけるハプスブルク家のこの参戦が、ヨーハンの運命を大きく変えた。フリードリヒ美公は甥に暗殺された国王アルブレヒト１世の嗣子で、アルブレヒトが画策したチェコ王国奪取の野望を完全に放棄してはいなかった。しかも、ヨーハンによってチェコ王国の王位を追われたケルンテン公が、なおも自分こそ正当なチェコ国王であることを主張し、国王選挙に際してはチェコ国王が持つ投票権を行使する構えを見せていた。帝国内のこうした情勢を見極め、またヨーハンが若年で政治家としては未だ経験不足であることも考慮して、この若き国王を補佐し後見する二人の大司教は、ヨーハンの擁立を断念した[54)]。しかし、ハプスブルク家の王位獲得はどうしても阻止しなければならなかった。ハプスブルク家が王位に登ると、ルクセンブルク家のチェコ王国領有そのものが危うくなるからである。そこで、ルクセンブルク陣営がヨーハンに替わる国王候補者として白羽の矢を立てたのが、ヴィッテルスバッハ家のオーバーバイエルン大公ルートヴィヒ４世である。ルートヴィヒは幼弱なニーダーバイエルン大公の後見権をめぐってハプスブルク家と激しく対立し、1313年、ガンメルスドルフの戦いでハプスブルク家の軍勢を撃破し、帝国内に一躍勇名を轟かせていた。フリードリヒ美公の対抗馬として国王に担ぎ出すには、まさに打ってつけの人物だったのである。こうして、1314年、尋常ならざる国王選挙が実施される。フリードリヒ美公を擁立する選帝侯たちはザクセンハウゼンに、ルートヴィヒ４世を擁立する選帝侯たちはフランクフルトに集まり、それぞれ別々に国王選挙を強行した。それは、異例ずくめの二重選挙であった。ヨーハンとケルンテン公はチェコ国王の名で別々の候補者に票を投じ、ザクセン大公家はウィッテンベルク系とラウエンブルク系に分裂し、それぞれの家系がザクセン大公の名で別々の候補者に票を入れた。選帝侯は７人であるにもかかわらず、実際には９人の選帝侯が国王選挙に名を連ねたのである。しかも、プファルツ伯ルードルフはルートヴィヒの兄であるにもかかわらず、弟には投票せずフリードリヒ美公の支持に回った。ヴィッテルスバッハ家内部の土地相続をめぐる骨肉の争いが国王選挙の場に持ち込まれたわけで、それが事態をさらに紛糾させた。この前代未聞の二重選挙は帝国を真っ二つに裂き、両陣営間の角逐は８年間続いた。この抗争に決着をつけたのが、1322年のミュールドルフの戦いで、ルートヴィヒの援軍として駆けつけたヨーハン率いるチェコ王国の大軍勢がルートヴィヒを勝利へと導いた。この敗戦でフリードリヒ美公はルートヴィヒの捕虜となりハプスブルク家は決定的な打撃を受けた。同家が帝国の王位に再び返り咲くにはその後１世紀余りの歳月を要することになる。ハインリヒ７世の客死に始まる帝国内の混乱で終始政局を左右したのは、ルクセンブルク陣営の動向であった。それほどの影響力を持ちながら、しかし、ヨーハンは父王ハインリヒの王位を継承することはできなかった。ハインリヒが道を拓いた皇帝権力への接近というルクセンブルク家の新路線は、頓挫したのである。しかし、いったんは帝国の王位を断念せざるを得なかったものの、ヨーハンが王位獲得の野望を捨てたわけではない。その野望を胸にたぎらせ、ヨーハンはヨー

ロッパ全土を奔走してさまざまな布石を打ちながら虎視眈々と好機の到来を窺い、やがて嗣子カールによってその野望を実現することになる。

こうして父王ハインリヒのドイツ王位継承に失敗したヨーハンに、追い打ちをかけるようにさらにいっそう過酷な試練がチェコ王国で待ち受けていた。ヨーハンが1311年にチェコ王国を掌中に収めた時、プシェミスル家最後の国王ヴァーツラフ３世が暗殺されて以来、５年間に亙り王位継承争いが熾烈をきわめる中、社会的混乱と政治的無秩序が王国全土を支配していた。王位に坐したヨーハンが最初に取り組むべき課題は、再び王国に秩序と安定を取り戻すことであった。父王ハインリヒがいまだ若すぎるヨーハンを案じて遠征軍に随行させたペーター・フォン・アスペルトの政治的手腕とヨーハンを取り巻く有能な家臣団の働きにより、王国奪取後はしばしチェコ王国に秩序と安定が恢復した。しかし、皇帝ハインリヒ７世の突然な不慮の死が、事態を一変させる。マインツ大司教とヨーハンの側近に権威を与えていたのは、王国の外部から来たこの異邦人たちが宗主国ドイツの国王に遣わされた代官であり、ハインリヒの皇帝戴冠後は神聖ローマ帝国皇帝に使命を託された名代であるという大義名分であった。この大義名分がある限り、たとえ王国外の異邦人であっても、チェコ人はその威令に服さざるを得なかった。ところが、ハインリヒの死によって、その大義名分が消滅したのである。異邦人がチェコ王国を統治する正当性が消失したのである。ヨーハンに随行した家臣団は、もはや単なるよそ者にすぎなかった。このよそ者たちの支配に甘んじてきたチェコ人たちの間に、現状に対する不満が高じていった。

新しく自分たちの国王となったヨーハンが、帝国内におけるチェコ王国とその住民の特殊性や、その伝統やしきたりを理解しようとする熱意を欠いていたことも、チェコ人たちの不満を増幅させた。ヨーハンは所詮よそ者の国王にすぎない、という認識が拡がって行った[55)]。不満のはけ口は、チェコ王国の官職者はチェコ人のみに限るという要求となって表れた。その要求を掲げる先頭に立ったのは王国の大貴族インジフ・ズ・リペーで、この大貴族の周りに反国王派が集結し、ペーター・フォン・アスペルトの手腕をもってしても、これら不満分子を懐柔することはできなかった。国王側が要求の受入れを拒んだ時、要求は公然たる反乱へと発展する（1315年）。民族間の反目に端を発するこの抗争は、やがて国王直属の顧問団を中心とする中央集権国家を目指す王権と、貴族たちが国政に参加するいわゆる後の身分制国家を志向する貴族連合との国家体制をめぐる闘争という様相を呈した[56)]。ヨーハンは武力による最終決着を企図したが、国王の強硬な姿勢を前にしてインジフ・ズ・リペーは隣国オーストリアとの提携に踏み切った（1317年）。つまり、国王ヨーハンとの戦いでは、貴族連合側に軍事的支援を行なうという約束を、ハプスブルク家のフリードリヒ美公から取り付けたのである。こうした事態の推移を憂慮したのが、バイエルンのルートヴィヒ４世であった。自分と敵対するフリードリヒ美公の勢力がチェコ王国内にまで及ぶことは到底看過できることではなく、ルートヴィヒは、1318年、ヨーハンと貴族連合との間に割って入り、強く両者に和解を促した。こうして、ラントフリーデ（国内平和）が告知され、王国内の内乱状態は終結した。叛旗を翻した貴族たちは改めて国王へ忠誠を誓ったが、ヨーハンにとって、この和解は屈辱的な敗北であった。ヨーハンが王国外から引き連れてきた軍隊の国外撤兵と、ライン地方から来た国王顧問団の解任が決定され、王国内の官職就任はチョコ人のみに限られるという貴族連合の要求が正式に承認された。そして、インジフ・ズ・リ

ペーとそれに与する貴族たちが官職を独占し、ヨーハンは事実上、国政から締め出された。こうした譲歩の代償としてヨーハンが手にしたのは、絶えず金策に追われていたヨーハンへの定期的な補償金の支給であった[57)]。ヨーハンは権力を剥奪されたのも同然であり、国王顧問団による中央集権国家体制の構築というヨーハンの宿願は完全に潰えた。王権に対する貴族の優位は、その後300年余りチェコ王国を支配することになる。

帝国東方にルクセンブルク家の勢力圏を築くというハインリヒ７世が敷いた路線は、チェコ王国の経綸の失敗で躓いた。失意のヨーハンはチェコ王国に足を運ぶことも少なくなり、この王国を手放すことさえ画策する。その頃、ヨーハンの盟友ルートヴィヒ４世は自分と敵対した兄のプファルツ伯ルードルフを屈服させてその伯領を召し上げており（1317年）、ヨーハンはチェコ王国とこのプファルツ伯領の交換をルードヴィヒと協議した。プファルツ伯領ならルクセンブルク伯領に近接し、両者が合体すればライン川沿いに強固なルクセンブルク家の勢力圏を築くことができると、ヨーハンは目論んだのである。しかし、プシェミスル王家の血筋を引く誇り高い王妃エリシュカがこの計画に断固反対し、ヨーハンの構想は立ち消えとなった[58)]。この一件はエリシュカにとっては夫君の許しがたい裏切りであり、これを機に、不信感を募らせたエリシュカとヨーハンとの間に決定的な亀裂が生じた。自分から離れていく王妃にヨーハンも警戒心を抱き、王妃から子供たちを切り離すという無慈悲な行動に出た。とりわけヨーハンが恐れたのは、王妃が嗣子ヴァーツラフ（後のカール４世）を自分に敵対する勢力の助けを借りて担ぎ出し、王位から自分を追い落として王妃自身がその摂政に収まるという危険なシナリオであった[59)]。そこで、ヨーハンは３歳余りと未だ年端のいかぬヴァーツラフをプラハ郊外の城に押し込め、外部との接触を一切絶って自分の監視下に置いた。ヨーハンの悪い予想は的中した。悲嘆にくれる王妃の周りにプシェミスル王家に深い愛着をもつプラハ市の有力者たちをはじめとする親王妃派が集まり、秘かにヨーハンから王位を奪う計画を進めた。1319年、自分を慕うこうした人々に押されるかたちで、エリシュカは夫君に対するクーデタを断行する。しかし、先に国王と敵対した貴族連合がこの内紛では国王夫妻の間に立ち、両者の和解を実現させた。この事件以降、エリシュカが政治に関与することはなくなり、ヨーハンもチェコ王国への関心を失い、王国の統治はインジフ・ズ・リペーを中心とする貴族たちに委ねて、自身はヨーロッパ各地を転々とする放浪生活に身を投じていく。

５．ヨーハンの家門勢力拡大政策

皇帝ハインリヒ７世という権威の後ろ楯を失って以後、ドイツにおける王位獲得の断念、チョコ王国における直接統治の失敗と、立て続けに過酷な試練が若いヨーハンを見舞った。こうしてハインリヒが着手したルクセンブルク家の新路線は、暗礁に乗り上げた。だが、相次ぐ挫折で失意のうちにあったヨーハンが自分の家門勢力拡大政策を本格化させていくのは、むしろ、この新路線が五里霧中の中に頓挫しかかった時期以降のことである。

ヨーハンが家門勢力の拡大を展開していく上で拠点としたのが、チェコ王国とルクセンブルク伯領であったことは言うまでもない。チェコ王国では事実上統治権力を剥奪され、ヨーハンが王国経営に直接携わる機会は失われた。それでも、ヨーハンの政策遂行において、チェコ王国は重要な意味を持っていた。統治権力を移譲する代償として、ヨーハンは定期的に支払われる補償金を手にした。さらにヨーロッパ有数の銀鉱脈であるクトナー・

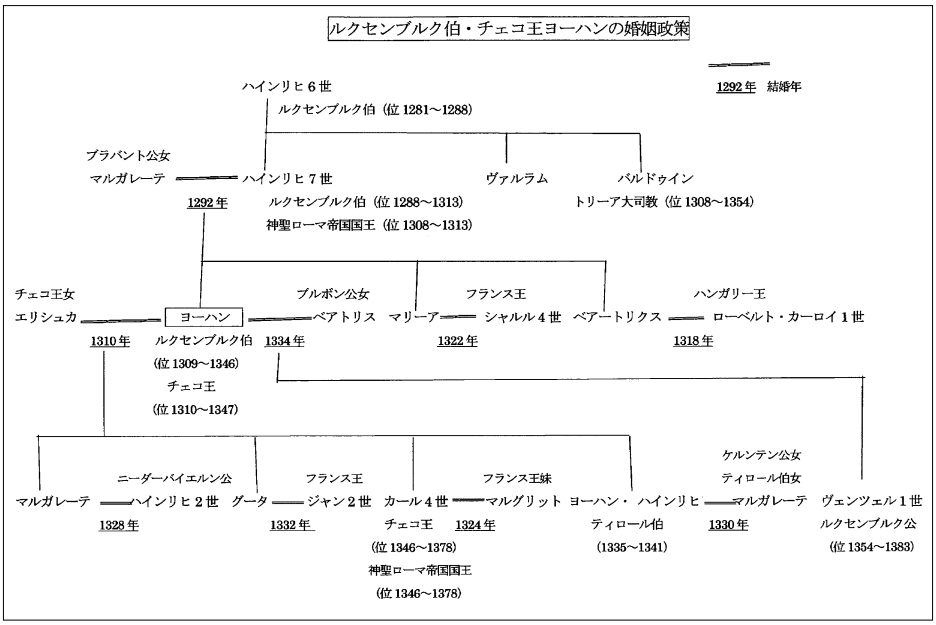
ホラ鉱山を有するチェコ王国は経済的に豊かであり、借財の返済に窮すると、ヨーハンはこの王国に足を運んで臨時の課徴金を徴収した[60)]。チェコ王国は、ヨーハンにとって、いわば貴重な金蔵だったのである。だが、それだけではない。王権とはさまざまな権限や権利の集積体であり、たとえその権限の行使が大幅に制限されたとしても、チェコ国王という称号はなおもそれに付随する諸権利の源泉であった。名目上にせよチェコ国王という肩書を保持する限り、チェコ国王が持つ歴史的権利をヨーハンは請求することができた。つまり、王国の直接統治に失敗しても、ヨーロッパ東部でルクセンブルク家の勢力拡大政策を展開する余地がヨーハンに残されたのである。

ルクセンブルク伯領の場合は、事情が全く異なっていた。チェコ王国はヨーハンにとって伝統も慣習も全く馴染みがない異郷であったが、ルクセンブルク伯領はヨーハンの産土（うぶすな）で一族が代々受け継いできた世襲領であった。チェコ王国は国政から締め出されて訪れる機会もまれなになった金蔵でしかなかったが、ルセンブルク伯領はその経営を直接担って存分に手腕を発揮できる自分自身の領邦であった。家門勢力の拡大のためにヨーロッパ各地を転々として不在にすることも多かったが、ヨーハンは領邦君主として伯領の強化と繁栄に力を注いだ。ルクセンブルク伯領とその周辺でいまだ伯権力に服さない領主層を家臣団に取り込む一方で、ヨーハンは家門の権利と伯領の利益を貫くためには周辺諸勢力と武力衝突に至ることも辞さなかった[61)]。また、ヨーハンの功績としてとりわけ注目に値するのは、伯領とその諸都市の経済的な振興を図ったことである。ヨーハンはルクセンブルク市に定期市を開設し、伯の居住するこの都市をイタリア北部とフランドル・ブラバントとを結ぶ通商路の中継拠点へと育て上げた。この通商路で営まれる中継貿易からの収益が、ルクセンブルク伯領の全収益の最も大きな部分を占めたと言われる[62)]。ヨーハンはまたその他の小都市の保護と育成にも努めたが、その治下でとくにルクセンブルク市の発展がめざましく、ヨーハン自身この都市を“首都”と呼び特別な優遇措置を講じた[63)]。

チェコ王国は帝国の東端にあり、ルクセンブルク伯領は帝国の西端にある。この二つの領国は、帝国内で相互に最も遠く離れたところに位置していたばかりでなく、民族や歴史や文化的伝統においても全く異なる住民で構成されていた。東西に分かれたこの二つの領国をヨーハンが同時に支配するようになって以来、それぞれの領国で等しく巧みな統治を行なうことはルクセンブルク家の歴代当主にとって至難の業となる。ヨーハン自身はルクセンブルク伯領の経営には並々ならぬ辣腕ぶりを発揮したが、チェコ王国の経綸はなおざりにしてその国内に滞在することさえ稀であった。しかし、ヨーハンが家門勢力の拡大政策を大規模に展開していくのは、経営にいそしんだ自分の世襲領を取り巻く地域ではなく、むしろ、自分が顧みることのなかったチェコ王国を取り巻くその周辺地域においてであった。家門勢力拡大の手段としてヨーハンが活用したものが二つあり、一つは婚姻政策で、いま一つはチョコ国王が持つ歴史的権利である。ヨーロッパ東部がヨーハンの勢力拡大政策の主たる舞台となるのは、その政策遂行を正当化する根拠がチェコ国王という称号に付随する歴史的権利にほかならなかったからである。

ヨーハンと王妃エリシュカは、チェコ王国の統治をめぐって鋭く対立した。両者の間の亀裂は深く、夫君が異郷をさすらう中、エリシュカは孤独のうちに生涯を終えた。このように幸福な結婚生活とはいえなかったにもかかわらず、しかし二人は子宝に恵まれた。エリシュカが残したこの子供たちこそ、いかなる手段にもまして、ヨーハンが活用しうる最

も有効な政治的資源であった。子供たちはヨーハンにとって、ヨーロッパ世界という盤上で自在に操る駒であり、その駒の一つ一つをいかに配するかがヨーハンの家門勢力拡大政策の主要課題であった。ヨーハンの子供たちを使った婚姻政策が最も頻繁に用いられ、しかも最も成果をあげたのが、フランス王権との提携強化においてで、婚姻によるフランス王権との強固な結びつきこそ、ヨーハンの外交政策の基軸となる。フランス王権への接近は父ハインリヒ７世によって本格的に開始されたが、当初それはフランス国王を主君と仰ぎ、自らを家臣とへりくだる封建的な主従関係であった。ところが、ハインリヒが神聖ローマ帝国の最高位に登りつめたことで、この関係は大きく変化する。ハインリヒを継いだヨーハンはドイツ国王にはなれなかったもののチェコ王国の国王であり、フランス国王とは対等の立場で提携を図ることができた。つまり、封建的な主従関係が、対等者同士の同盟関係に変化するのである。この同盟関係を深化させ盤石なものにするために、ヨーハンはフランス王家そのものと幾重にも婚姻関係を結ぼうと画策する。まず、自分の妹マリーアを、カペー王家最後のフランス国王シャルル４世に嫁がせた（1322年）。続いて、このシャルル４世の宮廷に、自分の嗣子ヴァーツラフを送り込む。ルクセンブルク家の伝統に従ってフランスの宮廷で嗣子に教育を施させるためであるが、また、プシェミスル家の正統な血筋を引くこの嗣子をチェコ王国から遠ざけるためでもある。よそ者でしかないヨーハンに心服しない反国王勢力がヴァーツラフを担ぎ出し、ヨーハンから王位を奪い去ってしまうのを危惧したのである。パリの宮廷にヴァーツラフを迎えたシャルル４世は、この義理の甥の堅信礼で名付け親を務め、自分と同じシャルル（ドイツ名でカール）という名を授けた。それから間もなく、シャルルことカールと、シャルル４世の叔父ヴァロワ伯シャルルの娘マルグリット（通称ブランシュ）との結婚が成立する（1324年）。この結婚で、ルクセンブルク家とフランス王家との結びつきは、新たな段階を迎える。シャルル４世が嗣子なくして1328年に薨かるとカペー王朝が断絶し、新たにヴァロワ



伯シャルルの嗣子フィリップ６世が即位してヴァロワ王朝が誕生する。この新しいフランス国王フィリップ６世はカールの妻ブランシュの腹違いの兄で、だから、カールとフィリップは義兄弟の関係になり、こうして、ルクセンブルク家とヴァロワ家の同盟関係の基礎ができた。この同盟関係をさらに強化するため、ヨーハンは次女のグータをフィリップ６世の嗣子ジャン２世に嫁がせた（1332年）。この結婚により、ヨーハンが構想したルクセンブルク家とフランス王家の同盟体制は完成する。フランスでカペー王家からヴァロワ王家へと王朝が交代する時期に、ヨーハンは婚姻政策という手段でフランス王権との強固な同盟体制を築き上げた。この王朝交代に端を発するいわゆる英仏百年戦争の激戦クレシーの戦いで、ヨーハンがフランス側に立って戦い壮絶な討死を遂げることになるのも（1346年）、自分自身が築き上げたフランス王権との同盟体制の当然な帰結だったのである。

ヨーロッパ全土でヨーハンが勢力拡大を図る上で根幹をなすのはフランス王権との提携であったが、ドイツ国内でヨーハンが提携相手として選んだのは、ヴィッテルスバッハ家のオーバーバイエルン大公ルートヴィヒ４世である。ハインリヒ７世の後継者を選ぶ1314年の国王選挙で、ヨーハン、トリーア大司教バルドゥイン、ケルン大司教ペーター・フォン・アスペルトのルクセンブルク陣営は、チェコ王国領有の野望を未だ捨てていないハプスブルク家のフリードリヒ美公が国王候補として名乗りを上げるや、その対立候補としてルートヴィヒを擁立した。先述のとおり、この選挙は結局二重選挙となり、ルートヴィヒとフリードリヒが対立国王として敵対する混乱が８年続くが、ハプスブルク家が共通の敵として存在する限り、ヨーハンとルートヴィヒは互いに相手を必要とした。とりわけルートヴィヒはルクセンブルク家の強力な後ろ楯を失うわけにはいかず、その提携を強化するために自分が後見人を務めるニーダーバイエルン大公ハインリヒ２世とヨーハンの長女マルガレーテとの結婚を推し進めた（婚約は1321/22年頃で、実際の結婚は1328年）。ニーダーバイエルン大公領はチェコ王国と隣接し、ヨーハンにとっても戦略上重要な位置にあった。ルートヴィヒとの提携は、こうして、ルクセンブルク家の勢力圏拡大へと繋がったのである。両者の緊密な連携は軍事同盟に発展し、その同盟が最大の戦果を上げたのが1322年のミュールドルフの戦いであった。この戦いの帰趨を決したのはルートヴィヒ側に参陣したヨーハンの軍勢で、その働きでルートヴィヒはハプスブルク家の軍勢を撃破してフリードリヒ美公を捕虜にし、ドイツ国内の分裂状態に終止符を打つ。この決戦こそ、ヨーハンとルートヴィヒの蜜月時代の頂点であった。だがそれは同時に、両者の決別の始まりでもあった。共通の敵の消滅で、両者は互いに相手を必要としなくなり、とりわけルートヴィヒは自分の勝利の最大の功労者であるヨーハンと次第に距離を置くようになり、ついには1330年代以降、ルクセンブルク家とヴィッテルスバッハ家の家門勢力拡大政策が真っ向から激突する事態へと発展する。しかし、1320年代は、ルートヴィヒ４世とその王権を承認しないアヴィニョンの教皇庁が激しく対立した時代で、異端と宣告されたルートヴィヒが教皇の認可なく帝冠を獲得するためにイタリア遠征（1327 ～ 1330年）を企てた。こうした教皇権と皇帝権との間の中世最後の衝突がヨーロッパ世界の焦点となり、その騒動の中でヨーハンとルートヴィヒとの間に生じた亀裂は顕在化するには至らなかった。

婚姻政策と並んでヨーハンが勢力拡大の手段として利用したのが、チョコ国王の持つ歴史的権利である。しかしそれを存分に駆使するために、ヨーハンはまずチェコ国王としての自分の地位をいかなる勢力の容喙も許さぬ

確固不動なものとしなければならなかった。プシェミスル王家断絶後の王位争奪戦で、ルクセンブルク家と激しく争ったのは、ハプスブルク家とケルンテン公にしてティロール伯のハインリヒ6世であった。ヨーハンは軍事力でチェコ王国の王位を奪取するが、争奪戦に敗れた両者がその王位への請求権を放棄したわけではない。ヨーハンが名実ともにチェコ国王の座を不動のものにするには、両者にその野望を完全に断念させねばならなかった。ハプスブルク家に関しては、ミュールドルフの戦いがそれに決着をつけた。この決戦に敗れた翌年の1323年、ハプスブルク家はチェコ王位への請求権を完全に放棄することで、ヨーハンと和睦した。しかし、チェコ王国を追われても頑固にチェコ国王の称号に固執したケルンテン公との交渉は難航した。ヨーハンは娘たちの誰かを嫁がせることで、ケルンテン公を懐柔しようと図った。しかしその娘たちとケルンテン公との年齢があまりにもかけ離れていたために、ヨーハンの試みは失敗に終わる。ヨーハンはそれでも諦めず、結局、ケルンテン公自身とではなく、その一人娘のマルガレーテ(通称マウルタシュ)と自分の息子ヨーハン・ハインリヒとの結婚を実現させた（1330年)。これはヨーハンが推し進めた婚姻政策の輝かしい成果で、この結婚でヨーハンは自分の地位を脅かす敵対者を一掃し終えたばかりでなく、ケルンテン公領とティロール伯領をルクセンブルク家の勢力圏に取り込むという大成功を収めたのである。

婚姻政策でルクセンブルク家の勢力圏を拡大するかたわら、ヨーハンはチェコ国王の持つ歴史的権利の貫徹を目指していく。この歴史的権利は、ヨーハンの義父でプシェミスル王家最後の栄光を体現したチェコ国王ヴァーツラフ２世がハンガリー王国とポーランド王国の国王をも兼ねていたという歴史的事実に由来する。つまり、ヴァーツラフ２世の王位を継承する者は、チェコ王国のみならず、ハンガリー王国とポーランド王国の王位をも継承する権利を持つという要求が、チェコ国王が持つ歴史的権利の主張の内容である。ヨーハンはチェコ王国の王位に即位した時から、この歴史的権利を継承したという強い自覚を持ち、それを貫徹する機会を窺った。ヨーハンのこうした思惑を背景にしてなされたのが、妹ベアートリクスとハンガリー国王ローベルト･カーロイ１世の結婚である(1318年)。ハンガリー王国では民族伝来のアールパード王家が1301年に断絶すると、ヴァーツラフ２世（ハンガリー王としては在位1301 ～ 1305年）が王位に即いたが、その死後、南イタリアからローベルト・カーロイ１世が招かれてアンジュー王朝を開いた（1308年)。ヴァーツラフ２世の後継者を自任するヨーハンは、ベアートリクスとこの国王との間に生まれた子供を介してハンガリーへの勢力拡大を狙ったのである。しかしベアートリクスが嗣子を遺さずに早世したために、ヨーハンの計画は頓挫した。その後、ヨーハンとローベルト・カーロイ１世との関係が概ね良好に推移したこともあり、ヨーハンがハンガリー王国に向けて勢力の拡大政策を仕掛けていくことはなかった。この王国の王位をルクセンブルク家が獲得するのは、ヨーハンの孫ジギスムントの時代になってからである。それに対して、ヨーハンがチェコ国王の歴史的権利を強く振りかざすのは、北の隣国ポーランド王国に対してであった。

ポーランド王国が歴史の表舞台に登場するのは10世紀のことで、ピャスト家の支配下に一時は神聖ローマ帝国に対抗する強力な統一国家を築いた。しかし、12世紀にピャスト家が分裂して王権が弱体化すると、ポーランド各地に諸侯国が分立割拠して王国は解体へ向かった。こうした状況の中でヴァーツラフ２世（ポーランド王としては在位1300 ～ 1305年）がポーランドの国王に迎えられてピャス

ト家のエルジュビエータを妻にし、分裂したこの王国に再び統合をもたらそうとした。ところがこの政策がかえってポーランド人の間に自民族で王国の統合を目指そうとする動きを加速させ、ピャスト家の諸侯の一人ヴワディスワフ１世が武力と外交で統合へと道を切り拓き、1320年ポーランド南部のクラクフで王位に即き王国再統合を実現させた[64]。こうしてポーランドの支配者となったヴワディスワフの王号獲得をヨーハンは認めず、ヴァーツラフ２世に由来するチェコ国王のポーランド王位請求権を楯に、しばしばポーランドへ侵攻を繰り返した。ヨーハンと同じようにヴワディスワフの支配権を承認しなかったのが、ポーランド南西部のシュレージエン（シロンスク）地方に割拠する諸侯たちで、ヨーハンはヴワディスワフと対峙する一方で、このシュレージエンには調略の手を差し向けた。1327年から翌年にかけてヴロツワフ侯をはじめとするシュレージエンの諸侯たちとヨーハンは次から次へと主従契約を結び、シュレージエン一帯にチェコ王国の宗主権を認めさせることに成功した[65]。このシュレージエン獲得こそヨーハンによる勢力拡大政策の最大の成果で、これ以降長らくシュレージエンはチェコ王冠（後に聖ヴァーツラフの王冠と呼ばれる）への帰属地としてチェコ王国と同じ歴史を歩むことになる。シュレージエンの帰順以後も、チェコ国王とポーランド国王の抗争は続き、この抗争に決着がつくのは1335年のことであった。この年にヨーハンとヴワディスワフを継いだカジミェシュ３世との間に和睦がなり、ヨーハンはポーランド王位への請求権を放棄し、カジミェシュはシュレージエンに対するチェコ王国の宗主権を承認した。

婚姻政策の活用とチェコ国王が持つ歴史的権利の主張がヨーハンによる家門勢力拡大政策の手段であったが、この二つの手段には共通点がある。いずれも、血統権に重きを置く手段だという点である。つまり、ヨーハンの勢力拡大政策は、何よりも血脈というものを正当性の根拠として展開されたということである。ところが、こうした正当性の裏付けがないままに、ヨーハンがルクセンブルク家の勢力圏に取り込もうと狙った地域がある。それは、帝国領イタリアである。イタリア北部を支配しようとする野望がヨーハンの胸中に芽生えたのは、1320年代前半、おそらくは1324年頃のことであった[66]。バイエルンのルートヴィヒ４世とアヴィニョンの教皇庁との対立が激化する中で、ヨーハンは突拍子もない構想を思い描いた。それは、ルートヴィヒがドイツを、フランス国王シャルル４世が帝国東部のアルル王国（旧ブルグント王国）を、ヨーハンが帝国領イタリアを分け合うという、神聖ローマ帝国を三分する構想である[67]。しかも皇帝の冠はヨーハンが戴くこともこの構想には含まれていた。父ハインリヒ７世の皇帝位を継承するというヨーハンの宿願がよく窺える構想ではあるが、それは実現する可能性の全くない妄想でしかなかった。その妄想はすぐ立ち消えになったが、ヨーロッパ各地に勢力圏を拡大することに成功した時、帝国領イタリアをルクセンブルク家の勢力圏に加えるという野望が再びヨーハンの胸中に甦る。しかもチェコ王国からイタリア北部に向かうルートは確保した。ニーダーバイエルン大公領、ティロール伯領とケルンテン公領は今やヨーハンの勢力下にあり、これらの勢力圏を辿って行けば、ヨーハンは誰にも邪魔されずに帝国領イタリアに足を踏み入れることができる。しかし、それは危険な賭けであった。従来の勢力拡大政策を支えた血統権という正当性の根拠がない実力のみが頼りの向こう見ずな冒険であった。こうしてヨーハンが着手した帝国領イタリアを支配下に置くという野望がいかなる運命を辿るかは、次回以降訳出するカールの自叙伝の叙述で明らかになるであろう。

註

1）ルートヴィヒ4世（1283/87～1347年）はヴィッテルスバッハ家の出身で、1294年にオーバーバイエルン大公領とプファルツ伯領を兄のルードルフとともに相続した。しかし、相続地の分割をめぐって兄弟の間に確執が生じ、それがヴィッテルスバッハ家の分裂を招いた。その一方、幼弱なニーダーバイエルン大公の後見権をめぐってルートヴィヒはハプスブルク家とも敵対し、1313年、同家の軍勢を撃ち破り、一躍勇名を轟かせた。皇帝ハインリヒ7世がイタリアで客死すると、ルクセンブルク陣営はハプスブルク家への対抗馬としてこのルートヴィヒを担ぎ出し、同陣営の強い後押しでルーヴィヒは1314年10月20日、フランクフルトで神聖ローマ帝国の国王に選出された。

2）ハプスブルク家の国王アルブレヒト1世の後継者で、フリードリヒ美公（1289～1330年）と通称される。1308年にハプスブルク家の家督を継ぎ、ルートヴィヒ4世より早く、1314年10月19日に、ザクセンハンゼンで国王に選出された。

3）1314年の二重選挙により、ドイツではルートヴィヒ4世とフリードリヒ美公が対立国王として並び立つ状況がしばらく続く。両者の対立に決着をつけたのは1322年9月28日のミュールドルフの戦いで、この一戦にルートヴィヒが勝利を収め、フリードリヒを捕虜にした。フリードリヒは1325年に監禁を解かれて共同統治王と認められるが、それは名ばかりの地位にすぎなかった。

4）ペーター・フォン・アスペルト（1240～1320年）。ルクセンブルク家に仕えるミニステリアーレ（家士）の家系に生まれ、1306年、マインツ大司教となる。その就任の前に、一時チェコ国王ヴァーツラフ2世（カールの母方の祖父）に書記官長として仕えたことがあり、プシェミスル家断絶後はカールの父ヨーハンのチェコ王位獲得に大きく貢献した。

5）バルドゥイン（1285～1354年）。カールの父方の祖父ハインリヒ7世の弟で、1308年にトリーア大司教となる。1308年の国王選挙で、ペーター・フォン・アスペルトとともに兄ハインリヒの擁立を画策し、ルクセンブルク家で初めての王位獲得を実現させた。ハインリヒのイタリア遠征に同行し、その客死後はルクセンブルク家の重鎮として甥のヨーハンを支えた。

6）アスカーニア家最後のブランデンブルク辺境伯（1281～1319年）。アスカーニア家は1134年にノルトマルク辺境伯領を授封され、エルベ川以東に領土を拡げて、1140年ないしは1142年以降ブランデンブルク辺境伯を名乗るようになった。ヴォルデマールの死によってアスカーニア家は断絶し、ブランデンブルク辺境伯領はその後、ヴィッテルスバッハ家、ルクセンブルク家と支配者を替え、1415年にホーエンツォレルン家の所有に帰す。

7）ハインリヒ･フォン･ヴィルネブルク（1244/46年～1332年）。1305年にケルン大司教となる。1308年の国王選挙では、ルクセンブルク家と提携し、ハインリヒ7世の選出を助けたが、その後　マインツ、トリーアの両大司教と立場を異にし、1314年の国王選挙では、フリードリヒ美公を支持する側にまわった。

8）正確にはザクセン－ヴィッテンベルク大公ルードルフ1世（1298～1356年）。当時、選帝侯家としてのザクセン大公家は、ザクセン－ヴィッテンベルク大公家とザクセン－ラウエンブルク大公家に分裂し、カールは言及していないが、ザクセン－ラウエンブルク大公ヨーハンは、1314年の国王選挙で、ルートヴィヒに票を投じている。

9）プファルツ伯ルードルフ1世（1274～1319年）。ヴィッテルスバッハ家の一員でルートヴィヒ4世の兄であるが、註1）で触れたように、相続地の分割をめぐってルートヴィヒと争い、国王選挙では弟ではなく、フリードリヒ美公に加担した。

10）アヴィニョン教皇庁２代目の教皇（在位1316～1334年）。ルートヴィヒ４世の王位を認めず、1323年、王権行使には教皇の認可が必要であり、帝位が空位の場合は帝国統治権は教会に帰属することを要求。この要求をルートヴィヒが拒んだために、教皇は、1324年、ルートヴィヒを破門に処した。ルートヴィヒ４世とヨハネス22世のこの対立は、中世ヨーロッパで繰り返された皇帝権と教皇権の闘争の最終局面をなす。

11）ルートヴィヒ４世は教皇との争いに決着をつけるため、1327年、イタリア遠征を決行する。1328年にローマに入り、１月17日、ローマ人民代表シャッラ・コロンナの手から皇帝冠を戴き、ヴェネーツィアーカステッロ司教ジャーコモ・アルベルティにより、塗油を施された。

12）フランチェスコ修道会の正式名称。当時、この修道会は、財産の所有を容認する穏健派と、聖フランチェスコの説いた清貧と無所有を貫こうとする聖霊派に分裂し、教皇ヨハネス22世は聖霊派を異端として弾圧した。弾圧された修道士たちは、スコラ哲学者オッカムのウィリアムのように、破門されたルートヴィヒ４世の宮廷に身を寄せ、激しい教会批判を展開した。

13）本名はピエトロ・ライナルドゥッチ。ルートヴィヒは、1328年４月28日ローマで、ヨハネス22世の廃位を宣言し、５月12日、ローマの聖職者たちによってピエトロを教皇に選出させ、ピエトロはニコラウス５世と名乗った。ルートヴィヒがイタリアを去ると、ニコラウスはヨハネス22世に帰順して赦され、1333年、アヴィニョンで一介の修道士として世を去った。

14）1330年１月。

15）1330年７月。

16）1330年８月６日。

17）第３章で言及されたハインリヒ６世（1270～1330年）。1295年にケルンテン公領とティロール伯領を兄弟とともに相続し、1310年以降は両地を単独支配。1306年にチェコ国王ヴァーツラフ２世の娘アンナと結婚し、プシェミスル王朝断絶後の1307年にチェコ国王に選ばれたが、1310年、カールの父ヨーハンによって王座を追われた。

18）上記のアンナで、逝去したのは1313年。

19）アーデルハイト（1285～1320年）。ケルンテン公との結婚は1315年。

20）マルガレーテ（1318～1369）。マウルタシュ（大口、Maultasch）と綽名される。カールの弟ヨーハン・ハインリヒとの結婚は、1330年９月に取り決められた。

21）カールの母エリシュカが永眠したのは、９月28日のこと。

22）イタリア中世の都市国家コムーネは、都市域（civitas）、都市の支配権に服すべき周辺領域コンタード（comitatus）、都市の勢力拡大によって新たに支配下に加わった従属領域（districtus）の三つで構成されていた。清水廣一郎『イタリア中世都市国家研究』、岩波書店、1975年、61頁を参照。

23）ヨーハンは、まず、1330年12月31日にブレーシャに入城した。翌1331年初頭、ロンバルディーアの皇帝派諸都市が相次いで、ヨーハンをシニョーレ（コムーネの全権を掌握した支配者）として迎えた。

24）アッツォ・ヴィスコンティ（1302～1339年）は、1328年にルートヴィヒ４世によって帝国代理に任じられ、1329年以降ミラーノのシニョーレとなり同市を支配した。カールの『自叙伝』では、アッツォーネ・ヴィスコンティとも記される。

25）レマン湖。

26）1331年３月29日。

27）1331年３月31日。

28）『告白』『神の国』などの著作で知られる古代末期最大のラテン教父（354～430）。

29）サン・ピエトロ・イン・チエーロ・ドーロ聖堂。アウグスティーヌスは長年司教をめた北アフ

リカのヒッポで永眠したが、イスラーム教徒の北アフリカ侵攻に際して、その遺骨はサルデーニャ島に移された。ランゴバルドの国王リウトプランドは、聖堂を720から725年の間に改築する際に、アウグティーヌスの遺骨をサルデーニャ島からパヴィーアに移してこの聖堂に安置した。

30）1331年４月15日。

31）現在はスイスに所属するヴォーの領主ルドヴィーコ２世（1275～1349年）。ルドヴィーコの娘カテリーナはアッツォ（アッツォーネ）・ヴィスコンティに嫁いでいた。

32）ヨーハンがパルマを発ったのは1331年６月２日。

33）カールの２番目の姉（1315～1349年）。グータとジャンの結婚式が行なわれたのは、1332年３月28日。

34）のちのフランス国王ジャン２世（在位1350～1364年）。

35）マルガレーテ（1313～1341年）がニーダーバイエルン大公に嫁いだのは、1328年。

36）ニーダーバイエルン大公ハインリヒ２世（1304～1339年）。バイエルン大公領は、1255年、その西部のオーバーバイエルンと東部のニーダーバイエルンに分割された。皇帝ルートヴィヒ４世は註１）に記したように本来オーバーバイエルンの大公であり、ニーダーバイエルンのハインリヒとその兄弟が未成年の間は、二人の後見人でもあった。

37）同盟は、1331年８月８日、カストルバルドで締結された。

38）ナーポリ国王（在位1309年～1343年）。教皇ヨハネス22世によって、ロマーニャ地方、教皇領、帝国領イタリアにおける名代に任じられていた。

39）スカーラ家のマスティーノ２世（1308～1351年）。1329年から1351年にかけて、シニョーレとしてヴェローナ市を支配した。

40）ゴンザーガ家のルイージ１世（1268頃～1360年）。1328年にマントヴァのカピターノ・デル・ポーポロ（市民軍の隊長、註44）を参照）に選ばれて以来、同市の実権を掌握。

41）エステ家のアルドブランディーノ２世が1308年にフェッラーラのシニョーレとなり、1317年以降は、その３人の息子リナルド２世、ニコロ１世、オビッツォ３世がシニョーレを受け継いで同市を支配した。

42）原文は diffidarent。中世ヨーロッパで、ラテン語の diffidare（diffidarent の現在不定形）という語は、「フェーデを通告する」という意味で使われた（Niermeyer, Mediae Latinitatis Lexicon Minus, Leiden, 2002）。フェーデは自力救済、私闘などと訳され、個人もしくは集団が自己の権利を侵害された場合、侵害した相手に対して実力を行使することで、中世ヨーロッパでは合法的な紛争解決方法として認められていた。ただし、その際には、事前に行使の時期と場所を通告する義務があるとされた。

43）ヴェローナがブレーシャを占拠したのは、1332年６月15日。

44）ミラーノがベルガモを奪取したのは、1332年９月27日。

45）カピターノ・デル・ポーポロのこと。中世イタリアの都市国家コムーネで、都市内の地区とアルテ（組合）を基盤に市民の間で編成された相互援助と共同防衛のための軍事組織がポーポロで、その隊長がカピターノ・デル・ポーポロである。

46）Jörg K. Hoensch, Die Luxemburger, Stuttgart, 2000, S.25.

47）Raymond Cazelles, Jean l'Aveugle, comte de Luxembourg, roi de Bohême, Paris, 1947, S.6.

48）ibid., S.5.

49）Jörg K.Hoensch, op.cit., S.52. ただし、Raymond Cazelles は、1305年頃とする（Raymond Cazelles, op.cit., S.7.）。

50）ibid., S.14.

51）ibid.

52）ibid., S.10.

53）ibid., S.19.
54）ibid., S.56.
55）ibid., S.60.
56）ibid., S.59-60.
57）ibid., S.60.
58）ibid.
59）ibid., S.61.
60）ibid., S.64.
61）ibid., S.66-67.
62）ibid., S.67-68.
63）ibid., S.68.
64）ステファン・キェニェーヴィチ編『ポーランド史１』（加藤一夫・水島孝生共訳）恒文社 1986　108-113頁
65）Jörg K.Hoensch, op.cit, S.73-74.
66）ibid., S.69.
67）ibid.